

遺産は本当の幸せを遺すのでしょうか

船場吉兆の騒動を耳にして、思い起こした言葉があります。

バブルがはじけて数年後に亡くなった母が遺した私と弟のそれぞれの住まいの時価を不動産屋さんに尋ねたら、福岡の中心地でバブルのとき億の値がついていた私のマンションは税務署の査定額8千万円の半額。しかも築年数から見て今後は値下がりがするばかりとのこと。

地方都市の弟の家は、広い土地と敷地内に借家も数軒有って将来は場所的に数倍の値上がりが期待できると言うのです。私に請求されている相続税は一等地ということで五百万円、弟はその半額。暗い顔をした私に不動産屋さんがしみじみと言いました。

「私の家は貧乏で、両親が一生懸命働いて3人の子供を学校に通わせ大きくしたから、親は何も残しません。でも私たち兄弟はそんな親を喜ばせたくて、お金を出し合って旅行させたり小遣いを上げたりして、そのときの両親の幸せそうな顔を見るのがとても嬉しくて、今度は

何処に旅行させようかと集まっては話し合うのです。仕事柄、遺産相続で兄弟姉妹が口もきかなくなるような争いを多く見てきました。親の遺産が子供たちに人間の本当の幸せを与えるのかなと時々思いますよ」と。

胸が熱くなりました。十数年経った今も忘れられません。

「創業守成」とは初代の築き上げたものを守っていくことの難しさを戒めた言葉ですが、今回の騒動を見聞きするにつけ、子供達は、単に財産を受け継いだけで幸せと思つたのかなあと哀しくなりました。

受け継いでいくものの中から、親の志というものが欠落していたのではないのでしょうか。

親が苦勞して築いた著名な資産を相続した2代目3代目はその名を汚したり、また小さくしている姿を見ると「遺産は子供たちに人間の本当の幸せを与えるのか」と十数年前に聞いた言葉を思い出します。(M.T)



シリーズ 守ろう! 野生動物

アホウドリ

アホウドリは北半球最大の海鳥。体長は約1m、翼を広げた長さは約2.5m、体重も7kg前後になります。体色は全体に白色で、翼と尾の先が黒色。頭から首にかけての山吹色が美しい鳥です。しかし、その大きな翼は地上生活には不向きで、人間は簡単にこの鳥が捕まるので「アホ」ドリと呼びました。19世紀後半から羽毛採集のために乱獲され、鳥島だけでも一年間に20万羽が犠牲になり、以後15年間で推定約500万羽の羽毛が取られました。乱獲は他の生息地にも波及し、乱獲に次ぐ乱獲でその数は急激に減りました。アホウドリに言わせれば、



こんな人間の行状こそ「アホウ」だったのかもしれない。

一時絶滅が報じられましたが、1951年に鳥島で、1971年には尖閣諸島でも生存が再確認されました。1981年以降、鳥島で営巣環境改善による保護増殖計画が進められ、ある程度の成功を収めています。

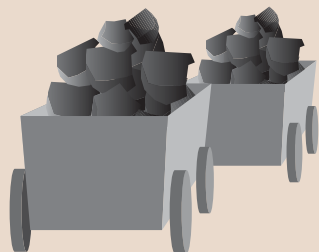
シリーズ エナジー 一口メモ

CCT

CCT (clean coal technology クリーン・コール・テクノロジー)という言葉をご存知でしょうか。石炭資源は他の化石燃料に比べ埋蔵量が多いのですが、CO₂や酸性雨など環境へ悪影響を与えかねません。そこで、安心して石炭を使用できるように、現在、世界の様々な国々で技術開発が進められています。このように、地球温暖化の原因となるCO₂や大気汚染物質、さらに石炭灰の発生量を低減し、環境にやさしく石炭を利用する技術の総称がCCTです。

日本では粉末にして燃やす「微粉炭発電」、高温高压の「流動床ボイラ」などすでに幅広い技術が実用化されています。また開発途上の技術には、石炭をガス化しガスタービンと蒸気タービンを組合せて効率をあげる「石炭ガス化複合発電」や、発電所から出たCO₂を回収、地中などに保存する「炭素隔離・貯留」などがあります。

CCTをアジアに普及できれば、電力分野だけでも2030年には日本の2000年時点の石炭由来の二酸化炭素排出量に相当する量の二酸化炭素が削減できるという試算もあります。



発行日 ■平成20年3月1日
(社)九州経済連合会
発行所 ■九州エネルギー問題懇話会
〒810-0001
福岡市中央区天神一丁目10番24号天神セントラルプレイス3階
TEL:092-714-2318 FAX:092-714-2678

NO. 37 2008

新エネルギーの
現状と
その可能性
ロングエッセイ



▲みやざきバイオマスリサイクル発電所全景(航空写真)

経済の発展と豊かな生活のために大量のエネルギーを消費した結果、地球温暖化や環境汚染と資源の枯渇という課題が現代社会に突き付けられています。地球は悲鳴を上げており、人類や生物の将来に深刻な危惧を与えるとの警告が発せられています。2007年度のノーベル平和賞が元米国副大統領のアル・ゴア氏とIPCC(気候変動に関する政府間パネル)に与えられたのも地球温暖化に世界が真剣に取り組む重要性が認識されたものと言えます。

高度な科学技術と環境へのやさしい配慮が バイオマス発電を支えている。

宮崎大学名誉教授 工学博士
大塚 馨象

温暖化防止対策として望まれているのは、循環型社会の構築や地球にやさしい新しいエネルギーの開発・実用化です。特にバイオマスを利用した発電や燃料化(バイオエタノール、バイオディーゼル)などに注目が集まっています。そこで、今回は新エネルギーの1つである「バイオマス発電」を実践する「みやざきバイオマスリサイクル(株)」の鶏ふん焼却発電施設(以下工場という)を大塚先生に訪ねて頂きました。工場の紹介や案内は、みやざきバイオマスリサイクル(株)取締役工場長 城島一彦氏にお願いしました。

そうに笑っておられました。場内に足を踏み入れて感じたのは、とても清潔なこと。ちりひとつない、という表現が決してオーバーではありませんでした。そして鶏ふんの臭いがほとんどしないことも意外でした。みやざきバイオマスリサイクルは鶏ふんの焼却熱を利用した、バイオマス発電施設なのです。

います。これにより●鶏ふんの大量焼却による減量化(約1/10以下)と焼却灰肥料による資源循環●環境負荷の低減(臭い、土壌・地下水への影響)●農家個別の設備投資軽減による畜産業の安定的成長●石油・石炭など発電用燃料の使用の抑制による化石燃料の温存と地球温暖化防止への貢献などの効果が期待されています。

コンパクトな施設 場内はちりひとつなく

宮崎県川南町、田園が広がり遥かに山々を望む地にみやざきバイオマスリサイクルの工場はあります。第一印象は、抱いていたイメージよりも小規模で、設備の一つひとつがコンパクトなこと。あらかじめ情報を得ていなければ、ここが発電所とは思えないかもしれません。取材スタッフの困惑を感じてか、大塚先生は「イメージより小さいですね」と愉快

宮崎県の特性を生かした 鶏ふんによるバイオマス発電

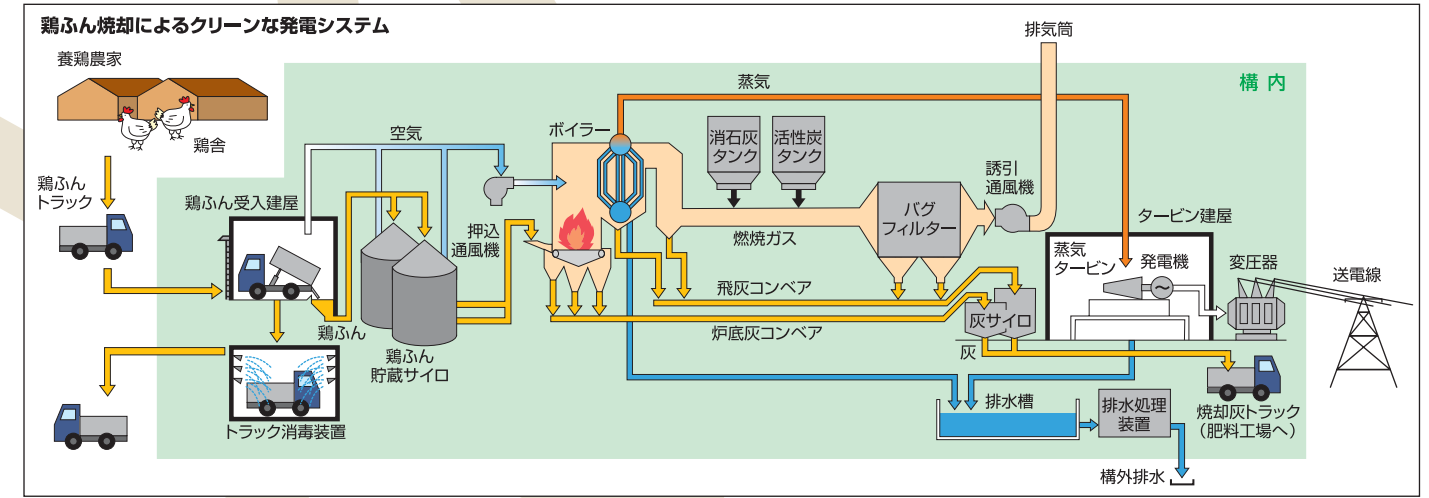
宮崎は畜産の盛んな県。特にブロイラーの飼養羽数では全国第2位の規模となっており、現在も増加傾向にあります。その副産物である鶏ふんは、発酵させて堆肥とするなどの一次処理に頼っていましたが、それにも限界がありました。また法規制も強化されてきました。そこで鶏ふんの適正処理と有効利用を図るために数社が協力して設立されたのが「みやざきバイオマスリサイクル株式会社」です。工場では、鶏ふんを大量に焼却し、その際に発生する熱を電気エネルギーに変換し、九州電力に売電するとともに、焼却灰を肥料原料として有効利用して

地域環境との共生、 地域住民との交流

以上のような概要を場内の一室で説明していただきました。大塚先生は熱心にメモをとっておられました。懇切丁寧な説明の中で特に印象的だったのは、工場のプロモーションビデオでした。ビデオでは地元の小学校の子どもたちが工場内を見学し、バイオマス発電への期待と、環境を守ることの大切さを話すシーンがあります。その意識の高さに感心するとともに、工場の方々の和気あいあいとしたふれあいに心温かなものを感じました。地域環境との共生、地域住民との交流。



大塚 馨象 氏 略歴
昭和14年 愛媛県生まれ
昭和38年 愛媛大学工学部電気工学科 卒業
昭和38年 (株)日立製作所入社
昭和60年 工学博士(東京大学)
平成6年 宮崎大学工学部教授
平成9年 九州エネルギー問題懇話会委員
平成17年 宮崎大学名誉教授
平成17年 九州エネルギー問題懇話会顧問
●電気学会会員●静電気学会会員●日本エネルギー学会会員



これも21世紀の新エネルギーであるバイオマス発電の、理想的な一つの在り方なのかもしれません。

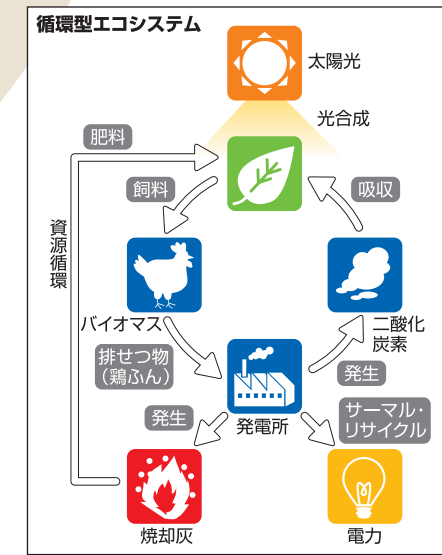
周辺環境に配慮した密閉型 科学技術の粋を結集して

さて、いよいよ工場の見学です。まずは鶏ふんを受け入れる建屋。ここでは宮崎県全域から1日に約460トンの鶏ふんを受け入れています。鶏ふんからの臭気は吸引してボイラで焼却。この受入建屋を初め、施設は周辺環境に配慮して密閉型となっています。鶏ふんはそれぞれが2,500立方メートルの貯蔵量をもつ2基のサイロにいったん貯蔵され、順次ボイラへ。ボイラは1日に440トンの焼却能力がありますが、規模は思ったよりも小規模なものでした。「このサイズでこれだけの焼却能力は素晴らしい。科学技術の粋だね」と大塚先生は感心しきりでした。焼却の際に出る排ガス中の煤じんなどはバグフィルターで除去、環境への配慮は行き届いています。ボイラで発生した蒸気は蒸気タービン発電機で発電します。発電出力は11,350kWにのぼります。実はこれらの工程は火力発電システムと同じ。つまりバイオマス発電とは、ボイラ燃料に、化石資源以外の「生物に由来する資源=バイオマス」を使う発電なのです。燃焼時に発生する二酸化炭素は生物の成長過程で吸収した二酸

化炭素なので、差し引きにより二酸化炭素が増えることはありません。だからこそ、バイオマス発電は地球温暖化を防ぐ新エネルギーとして、風力や太陽光とともに注目されているのです。

キーンという高速回転音は この施設の大きなシンボル

数時間の見学を終えて、工場を後にしました。帰りの車中で大塚先生が熱心に感想を語られました。「前に見学に来たときは大勢で、あまり丹念に見ることができなかったけど、今日は充実していたね。ほんとうに良く計画されている。良く考えておられる。順調に稼働しているのも当然だね」。「私は火力発電が専門だったのでタービンと発電機に興味があったの



だが、これも素晴らしいものだった。発電設備の建屋内でキーンという音がしたでしょう。あれはタービンが高速回転する音。つまりタービン自体はコンパクトにして、その分回転を高速にして効率をあげているんです。口で言うのは簡単だけど、大変高度な技術です」。

これからのバイオマス発電の 重要なモデルケースに

話のつれづれに大塚先生に質問しました。みやざきバイオマスリサイクルは、これからのバイオマス発電の良きモデルケースになるでしょうか。「それはもちろん。鶏ふんでのバイオマス発電は当然として、木材チップやペレット、汚泥焼却など、いろいろなバイオマス燃料を用いたバイオマス発電の重要なモデルケースになると思いますよ」。みやざきバイオマスリサイクル(株)は平成17年度バイオマス利用優良事業として「農林水産省 農村振興局長賞」、および平成18年度経済産業省資源エネルギー庁の「新エネ大賞」の内「新エネルギー財団会長賞(優秀導入活動法人部門)」を受賞しています。先生の言葉は、これらの受賞によっても裏付けられているようです。

車の窓を開けると、爽やかな風と共に鶏たちの鳴き声が聞こえました。その声はいつもより大きく、元気にあふれているように感じました。